色彩教材研究会通信　No.445　2025.6.5

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●秋色アジサイはアンティーク

気が付けば街路樹下の緑の茂みからポコポコと丸い塊が現れ始め、紫陽花（アジサイ）の季節到来です。紫陽花の色は土壌の性質によって変化することはご存じだと思います。酸性の土で育てた紫陽花は青系になり、アルカリ性の土で育てた紫陽花は赤系になります。日本では雨が多く降るため土に含まれるカルシウムが流れてしまうことなどから、酸性の土壌が多く、特に土壌改良をしないと青系の花が咲くことが多いとのことです。私が目にする街路樹下の紫陽花に青系が多いことも納得できました。私は紫陽花の色がレトロ感を醸し出した頃に心惹かれます。調べるうちに、これは「秋色アジサイ」であることがわかりました。秋色アジサイとは、花が咲き終わって花色が変わった紫陽花の花のことです。紫陽花の花は盛りを過ぎても花の形のまま残るため、さまざまな種類の紫陽花で秋色アジサイを楽しむことができるとのことです。時間の経過と共に深みのあるアンティークカラーになっていくのが特徴的であり、生花からアートに変貌するような感じもします。

参考 https://magazine.cainz.com/article/50877

（監査：井澤尚子）

●ポーラ美術館 COLORS 展から -3

今回色彩をテーマに様々な作品が展示されている中で数点取り上げてみます。

まず最初はポスト印象派では、「科学と象徴」というテーマで光の表現を追い求めた画家のジョルジュ・スーラの作品が多数展示されていました。色彩の解説ではシュブルールの同時対比の法則や、ニコラス・ルードの光の三原色ＲＧＢは混ざり合うと視神経が刺激され白に見えたり、緑と赤を混ぜると原色よりも明るい黄色に見えてこの理論を加法混色として、分解された色彩が見る人の網膜上で直接的に混ぜ合わされる視覚混合という概念になり、科学的理論を解説していました。

色彩学について知らない人でも、今回の COLORS 展をみることにより、きっかけが出来たと思います。　（幹事：田森恭子）

●大辞泉ひろいよみ　81 ーこ

紅唇：こうしん。赤いくちびる。べにをつけたくちびる。また、美人のくちびる。

黄塵：こうじん。空が黄色く見えるほどの激しい土ぼこり。

黄泉：こうせん。地下にあり、死者の行くとされる所。あの世。よみじ。冥土。

紅髯：こうぜん。赤いひげ。西洋人。紅毛。エビの異称。

紅藻：こうそう。葉緑素のほか紅藻素・藍藻素をもつ藻類。

香染：こうぞめ。丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。黄色味を帯びた薄茶色。丁子染め。

後退色：こうたいしょく。寒色系の色や明度の低い色で、その他の色と対比させると遠くにあるように見える色。濃い緑、濃い茶など。

黄濁：こうだく。黄色くにごること。

紅茶：こうちゃ。茶の若葉を摘み取り、低温で長く発酵させ、乾燥させたもの。また、それを熱湯で煎じた飲み物。液体は澄んだ紅褐色。英語では葉の色から black tea という。

紅潮：こうちょう。顔に血が上って赤みを帯びること。夕日や朝日に映えて、また赤潮などで、赤く見える海の波。

黄鳥：こうちょう。コウライウグイスの別名。

＊大辞泉：小学館発行国語辞典　（永田泰弘））